
強き燕は二度羽ばたく

龍々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強き燕は二度羽ばたく

【Nコード】

N3718Y

【作者名】

龍々

【あらすじ】

もしもピアノが弾けたなら…では無く、もしも海燕が生きていたなら、というお話。

外伝にて海燕が復活する過程の様な物が書かれていますので、是非そちらも御覧下さい

燕は再び羽ばたいた（前書き）

二次創作にて始めてのオリキャラが皆無な小説。
海燕カツコイイよ海燕。

海燕様——（・・）キタ——！！（下手く
そ）

それではどうぞ御覧下さい

燕は再び羽ばたいた

冷たい雨が激しく降り注ぐ中、小柄な女の死神の上に抱きしめる様に一人の男の死神が凭れ掛かる。

男の背には刀が貫いており、それを握るのは女の死神。

男の死神の名前は志波海燕、妻を虚に殺された拳句その虚に自分の体に乗っ取られていた。

そこを部下の朽木ルキアに解放されたのだが、それは死と同義だった。

「朽木い……俺の我儘に付き合わせてひでえ目に遭わせちゃったな……わりい、きつかったろ……？」

海燕はルキアの頭を撫で、せめてもの謝罪を述べる。

「ありがとな……お陰で、心は此処に置いていける……」

海燕はその言葉を最後に体を地面に落とし、息絶える。

ルキアは海燕の名を叫んだ。

自分の心を襲う罪悪感を振り払うかのように。

現世で死んだ者は虚に墜ちた者を例外として、通常は死神の手によってあの世、つまりは尸魂界へ送られるのだが、尸魂界で死んだ者は尸魂界を構築する霊子に分解される。

所が海燕はそれらの例に当てはまらなかった。

海燕の霊子は現世で再構築され、再び死神として蘇ったのだ。

「ここは……現世か？　どういう事だ？　俺は死んだ筈だよな……」

海燕は訳が分からないと首を傾げる。

暫らくすると海燕の近くに抑えてはいるが、恐らく隊長格と思われる巨大な霊圧が近づいてくる。

「えーと、この辺り何ですがねえ、副隊長クラスの霊圧が補足されたのは……」

その霊圧の主は下駄、甚平、目元を隠す帽子と正常な人間なら誰も

が警戒する出で立ちをしている男。

怪しい男は辺りをキョロキョロと見回しながら道を歩いている。余りの怪しさに、海燕は曲がり角の向こうで霊圧を消しながら隠れている。

「……その程度で隠れたつもりか？」

突然、黒い喋る猫が気配を絶って海燕に話しかけてきた。

海燕は思わず声を上げて驚き、下駄帽子の男にも見つかってしまう。

「おやあ？何処かで見たような顔ですねえ？」

「あ、あ、あ……」

海燕は下駄帽子の男を指を刺しながら驚く。

下駄帽子の男の名前は浦原喜助、元十二番隊隊長であり、技術開発局初代局長。

百十年前に尸魂界を追放され、それを最後に消息を絶っていた人物である。

燕は最初こそ浦原を警戒していた物の、途中からすっかり馴染んでしまった。

その理由は紬屋雨と花刈ジン太という少年少女にあった。

浦原に連れられ、恐る恐る浦原商店内に入った海燕を向かえたのが雨とジン太。

雨は内気で大人しく、ジン太は生意気なヤンチャ坊主。

何処にでもいる様な子供達が信賴している様子から、浦原が悪人ではない様に感じられたのだった。

尤も、子供達の戦闘力は人外そのものののだが。

「ハア……尸魂界にて絶命した筈が現世にて霊子が再構築され、復活、ですか、前例の無い話ですねえ……」

浦原はその言葉の後にそもそも、と付け加え、話を続けようとする。現世は尸魂界と比べて霊子が薄い。

その上で霊子が人体を構築している死神が現世で復活するのはほぼ不可能。

「……自分の霊子にプラスされる霊子の塊が無ければ、ですがね」
浦原の言葉に海燕はハツとする。

「そうです。恐らくあなたの体に乗った虚の霊子を吸収し、自分の霊子と混ざり合って現世で復活した、と考えるのが妥当でしょう」

浦原の話聞き、海燕は若干渋い顔をする。
当然だろう。

虚は妻を殺した挙句自分の体に乗っ取り、仲間に怪我させたのだ。その虚のお陰で蘇ったとするなら、自己嫌悪にも陥ると言う物だ。

浦原との話し合いの結果、海燕は当分の間、義骸という、現世で死神が使用する、人形のような物に入り、虚退治をしながら浦原商店で居候する事になった。

浦原曰く、宿代は店の手伝いで良いらしい。
こうして、海燕の現世生活が始まった。

燕は再び羽ばたいた（後書き）

海燕は僕がBLEACHの中でかなり好感度上位だったります。
もう全てがかっこよすぎる！！

でも僕が書くとかっこよくないのは何故！？
それでは次回もお楽しみに

燕は朽ちる女と出会う（前書き）

タイトルでお察しかと思いますが、ルキアと再会します。
若干カイルキ気味。

あ、でもくっ付いてラブラブ、と言う訳ではありません。
海燕には嫁もいたしね・・・

燕は朽ちる女と出会う

海燕が現世で生活を始めてから数週間、霊子の薄い現世でも問題なく生活する事が出来た。

さらに浦原から貰った滋養剤で霊圧を回復させ、現世でも尸魂界と同じ様に活動できる。

因みに滋養剤には髑髏マークが書いてあって、飲むのに戸惑ったのは失笑物である。

そして日々、虚退治をする中、死神と虚の霊圧がぶつかっている、即ち戦闘している事に気付く。

「……あ、死神の方やべえな」

海燕は斬魄刀、掟花を携え、その場に向かおうとするが、浦原によってそれを阻まれる。

浦原曰く、助けに行くのはもう少し経ってから、との事。

死神の霊圧は一瞬、薄くなったが、その後直ぐに最初より増幅して蘇る。

海燕は不思議に思いながらも、浦原はこれを待っていたのだと察する。

「さ、死神サンの元へいきましようか！」

浦原はいつもの格好で海燕と共に霊圧がある場所へと向かった。

「あ、あなたは……」

気絶したオレンジ色の髪を生やした死神と白い着物を着た、力を失った死神。

その死神が海燕を見て、驚愕している。

海燕の方はその死神を見て、驚くと共に嬉しそうな表情を浮かべる。

「海……燕、殿？」

海燕の名を呼んだ死神の名前は朽木ルキア。

海燕の嘗ての部下であり、自分を虚の呪縛から救ってくれた、女の死神。

尤も、ルキアの方は自分が海燕を殺したという自責の念に駆られているのだが。

「久しぶりだな、朽木！」

笑顔で自分の名を呼ぶ海燕にますます困惑するルキア。

海燕はどう説明しようかと悩んでいる。

「まあまあ、積もる話は後にして、今はこの少年とその家族の皆さんの手当てをしましょうか、もちろん記憶置換も忘れずに」

海燕とルキアは浦原商店にて、互いの状況等を説明しあう。

海燕は尸魂界で絶命した後、現世で復活、ルキアは現世に駐在任務を言い渡された後、オレンジ色の髪をした靈感のある少年、黒崎一護と出会いその家族が虚に襲われて、ルキアも負傷して一護に霊圧を贈与し、今に至る。

「……海燕殿の説明が異様に短いのは気のせいでしょうか」

「あー、気にすんな、俺も今一自分の状況が良く分かってねえんだ」
そう言う海燕を見て、ルキアは突然ホロリと涙を流す。

海燕はルキアの頭を撫でた後、優しく笑いかける。

「申し訳ありませんでした……海燕殿！！」

ルキアは海燕の手を握り締め、海燕の生を実感する。

そして海燕はルキアの罪悪感を洗い流すようにルキアを抱きしめる。
「いいか、俺は虚に殺されたんだ。そして朽木は俺を救ってくれた恩人だ。朽木が気にする様な事は何一つねえよ。あの時、俺を救ってくれてありがとうな」

ルキアは海燕の言葉一つ一つに涙を流し、全てが救われた。

燕は朽ちる女と出会う（後書き）

海燕をカッコよく書けない……他の方の作品でみた海燕は感動するほどカッコ良かったんですけど……ああ、どうしてこうなった。

燕は護る者に修行を施す（前書き）

海燕と一護の初対面です。

一護は恋次と白哉の登場の時までに原作より強くするつもりです。

燕は護る者に修行を施す

ルキアの死神の力は現在、人間の青年、黒崎一護の中にある。

本来なら半分の力を渡した筈だが、何故か全ての力が一護に渡ってしまった。

因みに原因は今の所一護の霊力が異様に高かったから、としか解っていない。

そしてルキアは一護に死神代行として働く事を承諾させた後、これから毎日特訓をしていく事になる。

だが、一護に修行を教えるのはルキアでは力不足、浦原では店の営業がある為忙しい。

すると当然――

「今日からおめえに修行を教える志波海燕だ！よろしく！」

と、なる訳である。

一護の反応は当然、誰だよ、となり、ルキアからは自分の上司、と説明される。

今一腑に落ちない一護だが、強制的に体から魂魄を抜かれ、死神の姿になる。

その後海燕も義骸を脱ぎ、死神の本体が現れる。

「さて、修行第一段階だが……先ず一護、おめえには“始解”を習得してもらおう！」

始解とは、死神の斬魄刀の一段階目の解放。

斬魄刀の持ち主によって様々な姿形があり、能力も様々。

その名の通り直接攻撃を行う直接攻撃系、特殊な能力が備わっている鬼道系と、様々種類がある。

「本当なら死神になったばかりの奴に始解はムズイんだけど……

おめえは霊圧たけえから、ま、大丈夫だろ！」

いい加減に言う海燕を見て一護呆れた表情を見せるが、次の光景を見て、表情が強張る。

「水天逆巻け…… 掬花！」

海燕は刀を頭上に上げ、両手で器用に回転させる。すると刀の形状が変化し、三又の槍になる。

「俺の斬魄刀は掬花、つってな、水を操る流水系の斬魄刀だ…… 斬魄刀は解号と名前を呼ぶことで本来の姿を現す…… 一護の斬魄刀はどんな能力なんだろうな？」

海燕が得意げに笑うと一護は少し感心する。

自分の刀がどんな物なのだろうかと少しドキドキしてしまったのは内緒の話だ。

一護は現在、胡坐をかいた膝の上に斬魄刀を置き、精神世界に入ろうとしている。

斬魄刀の始解に必要なのは対話と同調。

対話は斬魄刀の本体との会話、同調は本体との霊圧のシンクロを指す。

さらに斬魄刀との絆を深める事により、刀に眠る力が解放されていき、それは死神の鍛錬の一つでもある。

一護は精神世界の中でサングラスと黒いコートを着用した髭面の男性とで会つ。

一護は名前を聞くもその言葉の名前の部分だけノイズが掛かったように途切れ途切れになり、しっかりと耳に届かない。

「あんたが、俺の斬魄刀…… か？」

一護は男性に自身の刀であるかを確認する。

男性はコクリと頷き、再び自分の名を口に出す。

「私はざ…… つだ。お前と会つのを楽しみにしていた、一護……」

「俺の名前をしってんのか？」

男性は再び頷き、自分が何であるかを話す。

「私はお前の力、そしてお前自身…… お前の知っている事は全て知っている。そしてお前の知らない事も……」

一護は男性の言葉に耳を傾けながら、この人物が自分の斬魄刀、力の源である事を理解する。

「なあ、名前は聞き取れねえけど、いつか俺があんたの名前を聞ける様になったら力を貸してくれるか？」

「私はお前に力を貸すときは出し惜しみをしない。私の名前が聞こえたならば、いつでも力を貸してやろう……」

「……ってな事を斬魄刀は言っていたぜ？」

一護は男性と話した会話の一部始終を海燕に話す。

海燕は公園のテーブルに座りながら一護の話を聞き、真剣な面持ちで相槌を打つ。

「ま、一回で名前が分かったら誰でも死神になれらあな。そこまで会話出来ただけでも大したもんだ」

海燕は気さくに笑い、一護を好評価する。

一護は少し得意げになった後、ルキアの方を見る。

「で、あいつは何してんだ？」

ルキアは真剣かつ緊張しながら大声でホラー漫画を音読しており、その場に異様な空気を流していた。

一護は自分の体に、海燕は義骸に戻った後で休憩中。

そして一護の背後に忍び寄る黒い影が一つ。

「くつろさつき、くーん！！」

「ぎゃあ！？」

一護にいきなり声を掛け、驚かしたのは井上織姫という、一護のクラスメイト。

人間に扮して学校に通っているルキアは一瞬誰だか分からなかったが、一護に教えられ、どこぞのお嬢様の様にスカートの裾を上げて挨拶する。

「あら、井上さん、ご機嫌よう！」

「い、ご機嫌よう」

少々、というか大分天然の気がある井上はそれに釣られ、自分もスカート裾を上げて挨拶する。

一護が心の中で井上にツツコミを入れたのは仕方のない事だろう。

「あれ、そっちの人は？なんか黒崎君に少し似てるけど……」

井上は海燕を見て不思議に思い、その疑問を素直に述べる。

海燕は何を言おうか迷った後、似てるのは偶然で、自分は一護の昔の知り合い、と話す。

その様子から見て、嘘を付いているのはバレバレなのだが、井上には十分それで通じた様だ。

そしてルキアは井上の右ひざを見て、ある事に気付く。

「井上さん……その傷は……ちよつと見せてもらってもいい？」

ルキアはその傷を見て、険しい表情を浮かべる。

そして海燕の顔を見て、互いに頷き合う。

何がなんだかわから無い一護と井上はそろって首を傾げる。

一護は井上と別れた後、それぞれの家へと帰ろうとする。

海燕は浦原商店へ、一護は自宅へ。

この時、一護はルキアも海燕と共に行くのかと思っていたが――

ルキアは何と一護の部屋の押入れの中にいた。

しかも妹のパジャマを勝手に着ながら。

「一護……虚だ……！」

突然、ルキアが飛び出し、一護の魂魄を抜く。

そして一護がいた場所には巨大な虚の手があり、虚はそのまま家の外へと逃げた。

「どういう事だ……今のは井上の兄貴だった……！！」

一護の部屋に沈黙が走った。

燕は護る者に修行を施す（後書き）

原作に生き返った海燕が加わるこの物語、
一護&恋次&ルキアの輪
の中に海燕が加わる訳ですよ。
妄想全開です！いやっほう！

燕は姫と巨人を助ける（前書き）

チャドと織姫の話。

燕は姫と巨人を助ける

一護とルキア、そして途中で合流した海燕が向かった先は何と井上の自宅。

ルキアの話から魂魄は、虚に堕ちた後に先ず身内の魂を食らうという事から虚、もとい井上の兄は先ず先に妹である織姫を襲うと予想する。

一護は相手がクラスメイトの兄であるという事から、斬る事に戸惑うが、海燕の話から戸惑いは決心へと変わる。

「虚を斬魄刀を斬るって事は罪を洗い流すって事だ。心を洗い流し、尸魂界にいける様にしてやるんだ。殺すんじゃねえ、昇華してやるんだよ」

井上の兄なら生前に大きな罪は犯していないはず、そう確信した一護は屋根を駆ける足のスピードを上げる。

一瞬、一護の背中に乗っていたルキアが振り落とされそうになったのには、海燕も思わず笑ってしまう。

井上の兄との戦闘の後、井上とその兄が和解し、兄は正気を取り戻した。

そして自分で刀を仮面に突き刺し、尸魂界へ昇華していった。

海燕は一護の修行の為、終始を見てるだけで終わり、井上と遊びに来ていた有沢竜貴に記憶置換を終えた後で一護の肩を強く叩く。

「兄貴の存在理由がなんたるか……いっちょ前な事言いやがって、この、このー!」

海燕は一護の頭をロックし、拳骨を捻じ込む。

一護は井上の兄に兄弟で兄が何故先に生まれてくるかをこう話した。兄は後から生まれてくる弟や妹を護る為に生まれてくる。

だから兄が妹に向かって“死ぬ”等とは間違っても言うな、と。

「でもよ、俺もそう思うぜ？兄貴が何で先に生まれて来たのかがよ

？」

海燕には妹と弟が一人ずついるという。

海燕曰く、どちらも口より先に手が出る頭の足りない馬鹿、この事だが、一護は密かに海燕も似たような物だと思った。

織姫の兄の一件が片付いたその数日後、一護達はさらなる事件に巻き込まれる。

一護はルキア、海燕と共に一体の虚を追いかける。

名前をシュリーカーという、生前、連続無差別殺人という犯した根本から“悪”の外道だ。そしてさらにその虚が追っているのは茶渡泰虎という、一護の親友であり、通称をチャドという。

正確にはシュリーカーが追っているのはチャドが抱えているインコで、インコの体の中にはシバタユウイチという少年の魂魄が入っており、シュリーカーはその少年に三ヶ月間自分から逃げる事が出来たら母親を生き返らしてやる、という真赤な嘘を語る。

そしてシバタを助けに来た死神達を襲い食っていたという。

「野郎……とんでもねえ外道だな」

海燕はシバタの事を想い、思わず表情を険しくする。

「間違いなく奴は地獄に落ちるでしょう……」

ルキアの言う地獄に落ちる、とは一般の人間が言うような悪い事をするところの類では無い。

本当に落ちるのだ。

先日海燕が行ったように斬魄刀で虚を斬ると罪を洗い流し尸魂界へと送られる。

だが、洗い流せるのは虚になった後の罪であり、生前に大きな罪を起こした虚は地獄に引き渡す契約になっているという。

途中の道で一護は妹である夏梨を見つける。

「一護！お前はその娘を家に連れて行け！！あの外道野郎は……俺

がとつちめる!!」

海燕は義魂丸を飲み込み、義骸を脱ぎ去る。

そしてルキアと共にシュリーカーの下へと急ぐ。

「そーら、逃げる逃げるお!!早くしねえと俺のヒルが爆発するぜえ!!」

シュリーカーは舌の笛で爆弾である蛭を爆発させていく。

恐怖感を煽る為に、中るギリギリの所でかわさせる。

「ム……!!」

チャドはシバタの入った鳥籠を自分の両腕で蛭の爆発から護る。

「ダメダヨ!オジチャンシンジャウヨ……!!」

シバタは必死にチャドを止めようとするもチャドは危険をかえりみずにシバタだけを護ろうとする。

それは死んだ祖父の言葉から来るものであり、チャドはシバタをシュリーカーから護る為に自分を犠牲にする。

「ほーら!!油断してると……」

シュリーカーは何時の間にかチャドの直ぐ真上で飛んでおり、爆弾である蛭をチャドに投げつける。

「死んじまうぜええ!!」

蛭がチャドに当たる寸前、その蛭は何かにか吹っ飛ばされ、その蛭は遠くで爆発する。

「てめえは俺がぶっ飛ばす!!」

海燕がルキアと共にシュリーカーの元へ駆けつけ、シュリーカーは新しい玩具が増えたばかりに気味の悪い笑みを浮かべる。

一方海燕は解放前の斬魄刀を構え、シュリーカーを睨みつける。

「もう一度言うぜ……てめえは俺が……」

海燕は瞬歩でシュリーカーの後ろに回りこむ。

「ぶっ飛ばす!!」

海燕とシュリーカーの戦闘が始まった。

燕は姫と巨人を助ける（後書き）

この小説での海燕の初戦闘。

海燕は“通常なら”圧勝する筈ですが……！？
次回をお楽しみに。

燕は魔に蝕まれる

海燕は解放した自身の斬魄刀を構え、シュリーカーに斬りかかる。ルキアは現在霊力が僅かしか持ち合わせていないので、チャドとシバタを非難させる事に専念する。

「転校生……さっき俺を追っていた奴は一体何なんだ？」

チャドはルキアにシュリーカーの事を訪ねる。

尤も、チャド自身にはシュリーカーの事は見えてもいなければ声も聞こえないのだが。

「案ずるな……奴は直に地獄に落ちる」

ルキアの言葉に疑問を覚えながらもチャドは黙ってルキアの隣に立つ。

海燕は掬花から溢れ出る水流をシュリーカーに向け発射する。

シュリーカーはそれを全て避けるが、時々掠つてもいる。

海燕は元護廷十三隊、十三番隊副隊長だ。

シュリーカーは死神を二人ほど食らっており、霊力もそこそ高い。だが所詮はそこそこ、であり本物の実力と経験を重ねた海燕には遠く及ばない。

「テメエの悪事も此処までだ！地獄に落ちて反省しろ！！」

地に落ちたシュリーカーに海燕が斬りかかる。

が、海燕の手はシュリーカーに当たる寸前で止まり、もう片方の手は自身の頭を押さえる。

突然、海燕に頭痛が襲ったのだ。

「ぐううう！？何だ……こんな時に……ぐああ！」

海燕は遂に掬花を手から放し、地面にのた打ち回る。

これを好機と見たシュリーカーは、一旦距離を取り、大口を開けて海燕を食らおうとする。

『テメエは俺の三人目の餌だ！美味しく頂いてやるぜえ！！』

シュリーカーの齒が海燕の肩に食い込む。

頭と右肩、両方の痛みが海燕に身体を襲い、肩からは血を流す。

『ん？なんだ？この匂いは……そうか、テメエも俺と同族じゃねえか？』

「どういう…事……だ」

海燕はシュリーカーの発言に疑問を覚えながらも掬花を握ろうとする。

だが、如何せん、手に力が入らず、掬花は虚しく地面に転がる。

シュリーカーは今度は海燕の腕に噛み付く。

シュリーカーは海燕の腕から離れようとせず、海燕の肩から鮮血が舞う。

だが、シュリーカーの仮面に一閃、刀傷がつく。

一護が戻ってきたのだ。

「大丈夫か海燕さん……何があつたか知らねえけど、あんたがそんなになるまでやられるって事はあいつ、強えのか？」

一護はまだ名前の分からない斬魄刀を抜き、シュリーカーの方を向く。

そして一瞬でシュリーカーの背後へ回る。

海燕から教わった“瞬歩”を使用したからだ。

一護は巨大な斬魄刀でシュリーカーの背中を斬り裂き、次に足を刀で串刺しにする。

『ぎゃああー！』

「わかるか？狩られる奴の恐怖が？」

シュリーカーは自分で足を引きちぎり、空中へ逃亡する。

「そつだ、自分で足を千切って逃げなくなる程怖えだろ？……その恐怖を、たっぷり味わいやがれ！！」

一護は空中までシュリーカーを追いかけて、仮面を貫く。

するとその空間から大きな門が現れる。

これは地獄の門、生前に罪を犯した虚を裁き、地獄に閉じ込める為の入り口。

シュリーカーは大きな刀でその身を貫かれ、大きな笑い声を上げる地獄の使者と共に地獄に落ちた。

一護達はシバタの魂魄を元の身体に戻そうと試みたが、体と魂魄が長く離れすぎた為、因果の鎖が既に切れていた。

その為、シバタは尸魂界へ送られる事になる。

チャドはシバタと別れの挨拶をした後、ルキアに記憶置換をされて虚に関する記憶が全て消された。

一護は傷ついたチャドを自宅、つまり黒崎医院に連れて行った。

一護と分かれた後、海燕は浦原に先ほどの頭痛の事を話す。

「……そうですか、確かに虚は、志波サンの事を同族、と言ったんですね？」

海燕は浦原にああ、と返事をした後、どういう事を尋ねる。

「えー、とにかく、死神にそう言う症状が過去にも確認されていてねえ、専門家を紹介しましょう。その人達はそういうの大得意ですから」

海燕は浦原に連れられ、ある場所に向かった。

燕は魔に蝕まれる（後書き）

タグの内なる虚…（タメ）…ですね。
そして海燕の内なる虚は…おっと、危ない危ない。
次回をお楽しみに。

燕は仇と出会う

海燕が浦原に連れられていった場所とは、空座町の外れにある倉庫。さらに倉庫の地下には広大な空間が広がっており、浦原商店の勉強部屋に心なしか似ている。

違う所と言えば温泉がない事と何故かキッチンがあることだ。

さらに言えば隅には某少年漫画や成人向け雑誌が綺麗に積み重なっていた。

「皆さーん！少し用事があるのですがー！！」

浦原が大声でこの空間の主を呼ぶ。

すると数人の男女が瞬歩を駆使してその場に姿を現す。

「何や、浦原？そいつ死神やろ？」

おかっぱ頭の青年、平子真子が海燕を指差す。

海燕の頭の中にはこいつ、何処かで見たことがあるな、という疑問でいっぱいだった。

当然だろう。

此処にいる男女等は過去に一人を除き護廷十三隊の隊長、副隊長だった者達である。

平子真子^{ひらこしんじ}を筆頭^{なるがき}に猿柿^{さるがき}ひよ里^り、愛川^{あいかわらぶ}羅武^{ろぶ}、鳳橋^{おおとりばし}楼十郎^{ろうじゅうろう}、矢胴^{やたい}丸リサ^め、六車^{むくるまけんせい}拳西^{くなましろう}、久南^{くなましろう}白^{くなましろう}、そして元副鬼道長^{うしようだ}、有昭^{はちげん}田鉢^{はちげん}玄のメンバーで構成されるのが仮面^{ヴァイ}の軍勢^{ザード}という集団である。

浦原が海燕を此処に連れてきた理由は海燕の頭痛の原因にある。

それは海燕が現世に復活する経緯にあった虚の霊子を吸収した事から海燕の中に内なる虚が巣食っているので無いか、という事。

この仮面の軍勢は嘗て死神でありながら虚の力を手にしてた者達であるという事から此処に連れて来たのだ。

そして元五番隊隊長、平子真子が調べた結果、案の定海燕の中に虚の存在があったという。

「ど、どうすりや俺の中の虚を追い出せるんだ？」

海燕の問いに平子はチツチツチ、と指を鳴らす。

「追い出すことは出来へん……飼い慣らすんや、自分の方が強い、
って叩き込んでな？」

平子の後に、元十二番隊副隊長、猿柿ひよ里がにやりと口角を吊り上げる。

「これはワレが“元”死神やから協力するんやぞ？現役の死神だつたら放っておいたわ！」

この少女は死神や人間といった存在を嫌っており、それらの存在は殺すのも躊躇わない。

それをいつも平子が止め、ひよ里が平子をどつくのは平子にとって災難である。

三時間前、平子によって意識を落とされた海燕の姿は段々と虚のそれに変わっていった。

それを鉢玄、通称ハッチの鬼道によって結界を張られ、仮面の軍勢がその中で順繰りに虚かした海燕と戦う。

海燕の精神世界には海燕と同じ姿、唯一つ違う所は色が全体的に白い所だろうか、その姿をした虚がいて、海燕に話しかけた。

『久しぶりよの、この世界の王よ……』

その声は虚独特の地に響く声をしていた。

そして海燕は虚の久しぶり、という言葉に疑問を覚える。

「お前なんか知らねえよ、生憎俺には虚の知り合い何かいねえんだ」
海燕がそういうと虚はニタリと口角を吊り上げる。

『……うむ、こういえば分かりやすいかのう？“貴様の女は美味かった”ぞ！』

瞬間、海燕は刀を抜き、虚に斬りかかる。

すると虚は素手でそれを受け止め、真剣白刃取り宛らの状態となる。

「てめえ……あの時の虚かよ……！！！」

海燕は物凄い形相で虚を睨み付ける。

一方、虚は薄ら笑みを浮かべたまま、片手を離し、腰に刺してある刀を抜く。

そして海燕の頭に振り下ろすが、海燕はそれを瞬歩で避ける。

「テメエが俺の中にいるとはな、胸くそ悪いっていったらありやしねえ……」

海燕は内心で舌打ちをして虚を睨み付ける。

相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべたままの虚は刀を頭上に上げ、くるくると回し始める。

「おい……その動作は……」

虚は笑みを絶やさず、海燕のほうを見る。

『水天逆巻け…… 掬花アア!!』

虚の刀は白い色をした掬花となり、槍の先端から水流を発射する。

海燕も、自身の刀を解放した後、同じ動作をする。

「何でてめえが掬花を使つてやがる!？」

『当たり前であるう…… 我は貴様、貴様は我なのじゃ!! 同じ技を使えて何の不思議がある!？』

虚は笑い声を上げながら海燕に斬りかかった。

燕は仇と出会う（後書き）

やはり海燕の内なる虚はメタスタシアでしょう、と思い、こんな話になりました。

口調が良く思い出せない……

次回をお楽しみに

燕は魔を征する

精神世界で海燕が虚と戦っている一方、現実世界では元九番隊隊長、六車拳西が虚化した海燕と戦っていた。

拳西の斬魄刀は断地風たちかぜというコンバットナイフだ。

能力は糸状の風を打ち放ち、相手を切り裂くという、海燕の水流を放射する掬花と属性こそ違う物の、少し似ている所がある。

尤も、海燕は現在、虚化していて、斬魄刀の能力を比べる事は出来ないのだが。

『ギヤオオオオ！！』

啼き声、姿共に虚のそれとなった海燕の髪は蛇のようになっており、体からはいくつもの手や足が生えていて、それはまるで海燕の体を乗っ取った虚、メタスタシアの様になっている。

「ちっ、この馬鹿野郎が！！早く帰ってきやがれ！！」

今拳西が相手にしている虚は元々は海燕の物である体を使っている為、戦闘力も半端なく高い。

元隊長である拳西も虚化すれば元副隊長である海燕を簡単に倒す事が出来るのだが、この戦闘の目的は海燕を倒す事ではなく、海燕が“戻ってくる”までの時間を稼ぐためである。

「拳西……交代や」

元八番隊副隊長、矢胴丸リサが結界の中に入り、拳西とバトンタッチをする。

「海燕……っていったっけ？悪いけど、手加減はせえへんで、覚悟しとき！」

リサは斬魄刀を鞘から抜き、瞬時に開放する。

「潰せ！鉄漿蜻蛉はぐろとんぼ！！」

すると刀身が槍の様な、矛の様な姿に変形し、リサはそれを構えた。虚化した海燕は口を大きく開け、口内にエネルギーを溜める。

それは虚閃セロという、大虚や破面特有の技、霊圧で構築されている、

破壊の閃光で、虚の力を使う仮面の軍勢も使う事ができる。
海燕は虚閃を放った後、リサに向かって飛び掛った。

精神世界で海燕は自分の姿をしたメタスタシアとの戦闘で、相手を劣勢に追い込んでいる。

「おい！テメエはそんなに弱い癖して、都を殺したのか！？ふざけんじゃねえ！本気を出しやがれ！！」

海燕は許せなかった。

自分の愛するものがこんな弱い者に殺されたのかと思うと。

しかし次の瞬間、海燕の手から掬花が消え去り、メタスタシアは自身の持つ“掬花”で海燕を斬りさいた。

『ククク……忘れた訳ではあるまい？我には一日で最初に触れた物の斬魄刀を消滅させる事ができる……』

海燕は腹から血を流しながら、メタスタシアを睨み付ける。

「ああ、覚えてるぜ、だがな、俺はお前に勝たなきゃならねえ、都の為に、俺の為に……」

海燕はそういった後、ブツブツと何かを唱えるように言う。

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪・動けば風・止まれば空・波打つ音色が虚城に満ちる……破道の六十三、雷吼炮らいこうほう！！」

メタスタシアに雷を帯びた爆風が襲い、メタスタシアは感電してしまふ。

さらに――

「破道の五十四、廃炎はいえん！」

円盤状の炎がメタスタシアの顔面に中り、メタスタシアは苦しみ、悶える。

海燕は血を流しながらゆらりとメタスタシアの目の前に立つ。

「少しは分かったか？都の苦しみが、テメエ如きに喰われた無念が！テメエは今此处で、消滅するんだよ！！」

海燕は破道の三十一、赤火炮を零距离で放ち、自分ごとメタスタシアを攻撃する。

メタスタシアの右腕がだらりと下がり、音を立てて地面に落ちた後、黒く変色しながら消滅していく。

『ぐ……しょうがない、今は貴様に王の座を沸け渡して置いてやろう……しかし貴様が弱みを見せた時、我は貴様の全てを喰らう……そしてあのルキアという女の死神を……』

それだけ言うとメタスタシアは消滅し、海燕は仇を討てたと言うのに、まだ浮かない表情をしていた。

「都………」

現実世界にて、現在は愛川羅武が戦っており、最後にもう一度拳西の順番になる事で、その時点で海燕を殺す事が決定している。

「早く、戻って、来いよ！海燕！！」

言葉を途切れ途切れに、一息毎に海燕を攻撃する。

すると一瞬、海燕の動きが止まり、天に向けて咆哮を上げる。

そして虚の皮が剥がれて行き、中か元の姿の海燕が姿を現す。

「……やっと戻ってきやがったか……」

拳西が毒づくのと元九番隊副隊長、久南白が額に伝う汗を拭いながら溜め息をつく。

「カイン、やっと帰って来たんだね」

カイン、とは海燕のあだ名で、白は拳西以外の仮面の軍勢メンバーの名前の後に“ん”を付けて呼ぶのだが、海燕は元々最後に“ん”が付くので、本人なりに悩んで考えた結果、カイン、と呼ぶことにした。

海燕は目を開け、一息ついた後、皆に謝罪をする。

「迷惑かけて、悪かったな」

頭を下げる海燕にひよ里が飛び蹴りを食らわす。

「悪かったな、じゃ無いわ、ハゲ！！そこは申し訳ありませんでした、ひよ里様、やろが！！」

「何でデメエ限定で、しかも様付けで謝らなきゃなんねんだよ！！」

海燕は仮面の軍勢一人一人に礼を言った後、浦原商店に帰っていった。

そしてこれから毎日虚化の修行をする事になったのだが、海燕は最初から十五時間以上虚化出来たと言う。

本人曰く気合、らしい。

燕は魔を征する（後書き）

今回海燕が使った鬼道ですが、原作では一切使っておりません。

天才である海燕なら使えるかな〜という勝手な予想と、死神じゃない妹、空鶴が使ってるから死神で兄である海燕が使ってもよくね？
と言う事から雷吼炮とそれ以下の鬼道を使わせました。

原作で空鶴は詠唱付きで使っていたので、海燕も詠唱付きで。

それと零距离赤火砲ですが、一護や恋次とタイプが似ている海燕なら恋次と同じ事思いつくかな〜と。

言い訳ばかりですが、これからもこの作品をよろしくお願いします。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う(前書き)

キングオブニューヨーク……ブリーチを最初の巻から読んでいる方はネタが分かります。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う

現在海燕は一護に斬魄刀との対話をさせている。

斬魄刀との対話は自信の力を引き出す為に重要な事であり、それを行う事で本体との絆を深める事が出来る。

そしてここ二、三日で一護はようやく斬魄刀の名前を聞き出すことが出来た。

名前は斬月ざんげつ、解号の無い、常時開放型の刀で、攻撃力に特化している。

一護によると、斬月はまだ力を隠し持っているらしいが、それもその内引き出せるだろう。

友人にはもちろん死神の事は秘密であり、虚の事や、自分が霊が見えるという事に関しては一切話していない。

一護が学校へ行っている間、海燕は仮面の軍勢の元へ向かう。

「おいー！！修業に来たから開けてくれー！！」

倉庫のシャッターの前で海燕が叫ぶと、内側から元三番隊隊長、鳳橋楼十郎通称ローズの声が聞こえた。

「オーケー、今開けるから待っててよ」

ガラガラとシャッターが上に上がっていき、ローズがはい、と少々気障に海燕に手を振る。

海燕はそれを気にすることなく、よう、と軽く挨拶をし、地下へと向かう。

海燕が準備運動に腹筋をしてると突然、鳩尾にひよ里の飛び蹴りが入る。

「おいコラハゲエー！！暑苦しいから余所でやらんかいボケー！！」

その表情は悪戯っぽく、尚且つ楽しそうな顔をしているのには気付かず、海燕は涙目になりながらひよ里の首根っこを後ろからつかむ。

「こんのガキ……何すんだよ」

海燕が表情を引きつらせながら言つと海燕の顔面にひよ里の拳が入る。

「だ〜れが餓鬼や！！うちは大人の女性やっちゅーねん！！ワレの眼は節穴かい！ハゲ！！」

その後、海燕とひよ里の楽しい追いかけっこが始まったのには仮面の軍勢の面々はひよ里を生温かい眼で見るほか無かった。

海燕とひよ里、互いに頭にたんこぶを作った後で、虚化の修業をする。

海燕は白同様、一五時間以上虚化を出来るのだが、海燕のもっと伸ばしたいという向上心から、さらに修業を行う。

海燕の修業の相手を行うのはいつもひよ里だ。

ひよ里は楽しそうに、尚且つ生き生きと海燕と戦闘を行う。

「水天逆巻け……掬花ああ！！」

海燕の斬魄刀から水流が発射されるが、ひよ里は自身の斬魄刀、
「くひきりあるち 馘大蛇」の腹でそれを防ぐ。

馘大蛇の形状はひよ里と同じぐらいの大剣。

ひよ里は馘大蛇を両手で持ち、海燕に攻撃していく。

海燕はそれを上手く掬花で弾いていく。

「せっかく虚化したんやから……これぐらいせんかい！」

ひよ里は仮面の口を大きく開け、虚閃を放つ。

海燕は掬花から水流を発射し、相殺しようとするが、如何せんひよ里の虚閃の方がパワーが上だ。

虚閃によって、後ろに吹っ飛ばされた海燕の前にひよ里が仁王立ちをする。

「なんや、もう降参か！？よっわいのう！！ほれほれ、敗者は勝者の靴の裏を舐めるルールやぞ！はようしい！！」

海燕はそんなルール聞いた事が無いと頭の中で思い、ひよ里の足を手で弾く。

「だれが舐めるかよ、俺はまだ負けてねえ」

「上等!!」

「ひよりん、楽しそうだね」

白が寝転がり、頬杖を付きながら二人の戦いを観戦する。

さらに拳西が料理をしながら呆れたようにひよ里について話す。

「良い遊び相手が見つかったのはしゃいでんだろ」

そろそろ一護が学校から帰る時間になり、海燕は浦原商店に一時帰宅する。

その時にひよ里が不満そうな顔をしたのはまた別の話だ。

「さて、一護ん家に行くか、」

海燕は店から出て、一護の家へと向かう。

その途中で見覚えのある少年が住宅地の屋根の上を歩いているのを見かける。

尤も、それは歩いている、というより跳ねている、という表現をした方が正しいのだが、それは今はどうでもいい。

「一護……じゃねえよなあれは?……まさか、改造魂魄かありやあ!?!」

改造魂魄、とはその昔、護廷十三隊の十二番隊、つまり技術開発局が作り出した対虚用の兵士であり、死体にそれをいれて戦わせる、という計画により作り出された。

尤も、それは死体を戦わせる、という非道さから廃案になり全て廃棄されたのだが。

つまり今海燕の目の前にいるのはその廃棄から逃れた生き残り、という事になる。

そして今改造魂魄が入っているのは一護の体、という事は何が何でも止めなければいけない。

「待て。待ちやがれー!!」

海燕が追いかけてきたのに気付いた改造魂魄は捕まってるものなのかと速度を上げる。

海燕は瞬歩を駆使して追いかけるが、この改造魂魄は下半身を強化しており、足の速さは半端じゃない。

吾輩は改造魂魄である、名前はまだない……なんてな、ジョークジョーク。

まあ嘘では無いけどな。

俺様は廃棄される恐怖から逃れて町を自由に散歩中。

馬鹿な人間の体に入っているのが少し不満だけど……人間達の視線がめっちゃ気持ちいい！！所が、その途中で死神が追いかけてきやがった！！な・ん・で！？この町の担当はあの黒髪の姐さん一人じやなかったのかよ！？嗚呼、綺麗なお姉さん！何処かに居たら可哀そうな俺を助けて！！

改造魂魄が内心で叫び声をあげながら海燕の追跡から逃げる。

海燕は息を切らせながら瞬歩の速度を上げる。

途中から、一護とルキアと合流するが、途中で虚の反応があった。

何故か改造魂魄もそちらに向かい、三人はそれを疑問に思いながら改造魂魄を追う。

芋虫の様な虚と戦闘しているのは改造魂魄。

何故改造魂魄が虚と戦闘をしているかというところ、その理由は彼の生い立ちにあった。

生まれた次の日には自分の廃棄する日が決まっており、毎日を怯えて過ごした。

そして偶然、普通の義魂丸に混ざり、廃棄を逃れる。

だが、いつか見つかって廃棄されるのではないかという恐怖を感じながら現世で浦原の元へ辿りつく。

そして“粗悪品”の箱に入れられ、遂に廃棄されるのかと思った矢先に、雨の手違いにより、自由を手に入れる。

その経験から命は誰かが勝手に奪っていいものではないと感じるよ

うになり、彼は誰よりも殺生を好まない。

そして先ほど、虚が現れた場所には子供達の姿があり、改造魂魄はそれを救う為に虚の居る場所へと向かったのだ。

改造魂魄の戦闘に、一護と海燕が加わり、虚は昇華される。

その後、蟻を潰しそうになった虚を改造魂魄が蹴り上げて、建物から落下しそうになるなど、ハプニングもあったが、この一件は落着く——
するかと思っただが、そこに浦原がやってきて改造魂魄を廃棄すると言いたすが、ルキアが浦原から改造魂魄を奪い取り、一護の義魂丸はこれでいいという。

「知りませんよ……何かあったらあたしは姿を晦ましますからね……」

「元々霊法の外で動いてる貴様らだ、何も問題は無いだろう」

画して、改造魂魄のコン（命名一護）が黒崎家に厄介になるのだが、一護がこの先自分の義魂丸がコンでよかったと思うのはまた別の話だ。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出会う(後書き)

コンの登場でっす♪

コンカツコイイしかわいいしで好きです♪

テいうかブリーチで特別嫌いなキャラってルピ以外いない気がします。

一番好きなのはマユリ様です。

他にも剣ちゃん、海燕、えとせとら…

因みに今回のひよ里と海燕ですが、海燕にならひよ里も心を許すんじゃないかなあと言う妄想です。

浦原の前の十二番隊隊長(名前忘れた)は母親を慕うかのように懷いていたと言うので、海燕はお兄ちゃんて良いかな、と。

尤も、ひよ里は素直になれない反抗期のお子様みたいになってますが。

それでは次回をお楽しみに

燕は……（前書き）

今回は殆ど一護のターンです。

燕は……

息を切らし、憎き親の仇を討とうと自身の斬魄刀、斬月を振り下ろす。

対して、その虚はそれを軽々と避ける。

上を良く見れば雨雲が空を黒く染める。

一護は“六年前の今日”を思い出しながら、母親の敵、グランドフィッシャーを睨み付けた。

それは数時間前に遡る。

その時は雨の気配など無く、外には晴れ渡る空が続いていた。

一護の部屋の押入れに住み着いているルキアと、何となく部屋に上がった海燕に一護があるお願いをする。

「死神業を休みたいだと？戯けめ！そんな事が許される訳……」

ルキアの口を両手で塞いで海燕は一護に理由を聞く。

一護曰く、明日は墓参りだそうだ。

それも自分の慕っていた母親の――

ルキアもそう言われて却下する訳にもいかず、渋々一護が明日は死神業を休む事を承諾した。

そして、最後の一護の一言が無ければ、黒崎家だけで行かせる心算だった――

「明日はお袋が死んだ日――いや、“殺された”日だ」

一護の部屋に、暫らくの間沈黙が走った。

「おい、ルキア……オメエ本当についてくのか？今日ぐれえ家族だけの時間をだな……」

海燕の言葉を聞いて、ルキアは一回目を閉じて、言葉を整理した後、海燕の言葉に返答する。

「一護は母親が殺された――と言っておりました。それは若し

かしたら虚の仕業という可能性もあります。それを一護から聞かなければ……」

ルキアの主張に海燕は盛大に溜め息を付く。

まるで融通の利かない妹に世話を焼く兄の様に。

「わあつたよ……お前がそこまで言うんなら俺もついていく」

こうして、家族団欒の一時をルキアと海燕が邪魔をする事になったのだが、この時になって、この選択は正しいと思ったのだった。

大好きだった——否、今でもお袋は大好きだ。

俺のせいで死なせてしまった、家族の中心であるお袋を。

それは俺のせいでもあり、今、目の前にいる薄汚い虚のせいでもある。

こいつを倒す事で、お袋に償いが出来るのなら俺は——

「俺はテメエを倒さなきゃいけないえ!!」

一護は気合を入れるように吼え、グランドフィッシャーに斬りかかる。

石垣の上でルキアと海燕が一護と、その戦闘の行方を見守る。

腹から血を流しながらも、何かに取り憑かれたかの様に、一心不乱にグランドフィッシャーに斬りかかる。

だが、グランドフィッシャーは頭に付いている疑似餌を一護の母親の姿に変え、一護の攻撃の手を止める。

「止めて……一護、刀を引いて頂戴……母さんを斬らないで……!!」

グランドフィッシャーが一護の母親、真咲を利用したのが運の尽きだった。

何故なら、これで“グランドフィッシャー”は“一護”を完全に怒らせてしまったのだから。

「こんなところに……お袋の姿を担ぎ出してんじゃねえよ……」

一護は斬月を握り締め、溢れる力を確かに感じる。

そして、刀からは声が聞こえ、一護はその声に耳を傾ける。

「一護……この外道を許してはならない。叫べ……!!それはお前だけの力だ——」

一護はグランドフィッシャーの顔を睨みつけ、声を高らかに叫ぶ。

「月牙……天衝……!!」

白い三日月型の斬撃がグランドフィッシャーの仮面を割り、そのまま胴体も真っ二つに割る。

だが虚の弱点である仮面を割っても直ぐにグランドフィッシャーが消滅する事は無く、まだ口も利ける状態である。

『クッククク……ワシを殺して満足か?だが、貴様の母親殺しの罪は消える事は……』

ザク、とグランドフィッシャーの腹に斬月の刃が突き刺さる。

一護は無言で、汚物を見る様な目でグランドフィッシャーを見つめる。

「そうだ、俺の罪は消えない……俺がテメエの罠に引っ掛かりさえしなけりやお袋は死ぬ事が無かった」

だから、と刀を振り上げ、グランドフィッシャーに止めを刺そうとする。

「俺がお袋を殺したから、だから償いに少しでも多くの人間を護るんだよ……!」

斬月は、確実にグランドフィッシャーの仮面を捕らえ、その後で黒く変色し、グランドフィッシャーの体は消え去った。

グランドフィッシャーを倒した後で、呆ける一護の肩に海燕が手を置く。

そして唐突に、一護にある、質問をする。

「一護……心つてのは何処にあると思う?」

海燕は昔、ルキアに問いかけた事と同じ事を問う。

一護は当時のルキアと同じく、自分の胸に手をやり、其処に在る、と答える。

海燕は予想していた答えに苦笑した後、それは違うと言う。

「心つてのはな、此処に在るんだと、俺は思う」

そういつて海燕は自分と一護の間に拳を置く。

心は誰かと誰かと触れ合った時、其処に生まれるのだと、海燕は言う。

「オメエのお袋さんは、死んだ時に一護に心を預けたんじゃないのか？お袋さんが、一人で死んだ時、オメエは傍にいたんだろ？だからお袋さんの心は一護の中にあるんだ」

海燕が諭す様に一護に言つと一護は俯き、「くせえよ」と一言言つた。

その後、二人の殴り合いの喧嘩が始まったのだが、それは一護に取つて、気持ちを切り替える事が出来るいいチャンスだった。

燕は……（後書き）

海燕にカツコイイ事言わせようと思ったのに全然かつこよくならな
い……

何処かに文才落ちてないでしょうか。

見つけたら自分のとこまでお届け下さい（笑）

此処からは、話を考えたはいい物の、入れる場所がない事に気付い
てお蔵入りになった話。

浦原商店の一室でルキアともう一人、金髪の少女、猿柿ひよ里がに
らみ合っていた。

それに巻き込まれているのは、否、むしろ争いの中心となっている
のは海燕だ。

それは数時間前に遡る。

仮面の軍勢のメンバー、猿柿ひよ里が浦原商店の近くを通りかかっ
た時、中から海燕の声が聞こえたので、中を覗いてみた。

すると其処には海燕と談笑をする女性、朽木ルキアの姿があった。
何故か無性に腹立たしくなり土足で店内に入る。

「おいコラ！ハゲツバメエ！その馬鹿面女はなんやねんこら！！」
ひよ里が怒鳴るのを見て、ルキアが若干眉を吊り上げながら海燕に
尋ねる。

「海燕殿……この教育のなっていない子供は何者ですか……？」

この一言が切っ掛けで、冒頭に繋がる。

見たいな感じでワードに書いてみたんですが、入れる場所が全然無いので此处に書きました。
評価等はこれ抜きでお願いします。

燕は国民的大スターと出会う（前書き）

BLEACHの中で『こくみんてきすたー』と言えばこの方しかいません。

ドン・観音寺です！！

……テレビの司会風に言ってみました、気にしないでください。
ただのおふざけですから。

まあ、観音寺好きなんですけどね。

キャラ的にも中の人的にも。

あそこまではっちゃんける一般人（？）も珍しいですよ。
うふふのふ

燕は国民的大スターと出会う

派手な衣装を着た男が、テレビの向こうで何やら訳のわからない言葉を叫んでいる。

それは英語のなのだろうが、日本人にとって訳がわからないのは変わりがない。

男の名前はドン・観音寺。

本名を観音寺ミサオ丸と言うのだが、彼の職業は霊媒師兼芸能人。それも自身が主役の番組で毎週25%を取るほどに大人気の。

黒崎家では、一心と遊子が夢中になって見ているのだが、逆に一護と夏梨は興味が無い。

因みに一心と遊子は共に霊が見えないという事から、観音寺に憧れていると見える。

尤も、遊子の方はうつすらと霊を見る事が出来るのだが。

さらに一護は興味が無い所か、この番組の事が嫌いだ。

一護は自分が霊が見えるからか、霊、神などの存在が曖昧な物を使う商売が嫌いである。

だから雑誌のページにある、今日の運勢等も信じない。

だから、其処に新しい友達が出来る、等と書いてあってもこれっぽちも信じていなかった――

――のだが、一護は死神化した自分を視認する事が出来る男、ドン・観音寺に戦友と書いて友と呼ばれたのには気が萎えた。

それを見て海燕は苦笑するのだが、追ってくる虚がそんな暇を与えてくれない。

蛙の様な顔をした虚は口から粘液を吐き、此方の動きを止めようとしてくる。

一護が刀を振るおうにも此処は建物の中だ。

巨大なそれは相手に斬りかかろうとした時、天井に突き刺さってし

まう。

「此処が建物の中だつて事忘れてた……」

そんなミスをする一護に海燕は頭を抱える仕草をする。

因みに、一護の修業を図る為に手助けはしない。

「自分で何とかしろ!!」
デメエ

数歩下がって一護を見守る。

一護は自棄になって足で戦おうとするのだが、其処を何と観音寺が自らの持つステッキ、ただの棒なので名前は割愛するが、それを駆使して虚の動きを止める。

これには海燕も動かざるを得ず、観音寺を突き飛ばす。

「ノー!!ヘイ、ユー!!何をするのかね!?私がこの怪物に敵わないのは分かる!だが、
せめてボーイを護つて散ろうと……」

喚く観音寺の顔を踏みつけ、天井の、一護の刀が刺さっている部分を鬼道で破壊する。

「後は自分で何とかしやがれ!!」

海燕は観音寺を引きずりながら後ろへ下がる。

その際に観音寺が喚いていたのだが、海燕はそれを無視して後ろへ下がる。

一護を捕縛し、屋上へと移動する虚を追って海燕も屋上へ向かう。

「あの野郎……最近弛んでやがるな」

一護の体たらくを見て、そう嘆く海燕——の後ろを匍匐前進で付いていく観音寺。

この状況を一言で言うなら混沌カオスというだろうか。

その混沌の中心に居るのが観音寺なのは言うまでもないだろう。

屋上、つまり開けた場所に着いてからという者の、一護の動きは何時もの調子を取り戻していた。

それは狭い建物内に居たのもあるだろうが、観音寺という御邪魔無

視がいなくなったのが大きいだろう。

「ボーイ！私が来たからにはもう安心だ！！」

その御邪魔無視が態々此処に来たのは完全なる計算外である。
その後ろには面倒くさそう表情をしている海燕もいる。

「海燕さん……ちゃんと、監視しとけよ！！」

一回、二回、三回と斬りつけ、虚を弱らせる。

尤も、仮面を狙えば一撃で済むのだが、今の一護にそんな余裕は無い。

虚は高く飛び、上空に舞い上がる。

其処から先ほどの粘液を連射してくるのだが、一護の月牙天衝にて弾かれる。

そしてそのまま、三日月型の斬撃が虚の体を通り抜ける。

上半分と下半分が二つに割れた虚はそのまま、黒く変色し、昇華していった。

あの一護と海燕は観音寺にある物を渡された。

それは観音寺のファンクラブのメンバーズカードなのだが、直ぐに破り捨てたのは言うまでもない。

燕は国民的大スターと出会う（後書き）

一番弟子の一護と二番弟子の海燕です。
いや、

だからどうとか無いですけど。

燕は今回出番無く……（前書き）

まあタイトル通りです。

今回海燕は一言しか喋りません。

燕は今回出番無く……

虚を討伐するものの中に、死神とは別に滅却師^{クインシー}という者がいる。

彼らは虚を憎み、昇華させるのではなく、唯、滅却する事、殺す事だけを考えた。

その結果、尸魂界と現世のバランスが崩れ、世界が破滅する寸前まで至った。

その事で死神達は滅却師達を殲滅する事を決定。

今回は滅却師と死神の葛藤を描いた話――

それはとある夜の出会いから始まった。

何時もの様に虚を退治する一護とそれを見守る海燕とルキア。

何時もの様に、とっはいつでも最近は何者かに虚が倒されている為、虚と遭遇する機会が無かったのだが。

虚を倒した直後、眼鏡を掛けた、全身白の服を着ている青年が声を掛けてきた。

「こんばんは、黒崎君、朽木さん、それと……志波さんだったかな？」

突然現れた青年に警戒しながらも、刀を構えるという事はしない。

彼は虚ではなく、人間だからだ。

「……向こうに虚が出たみたいだよ？」

青年の手首にぶら下げている十字架のアクセサリーが一瞬、光ったかと思うと次の瞬間には青白く光る霊子の矢となっていた。

「疾っ！！」

その一言と共に矢を放つとそれは的確に虚の仮面を捉え、昇華、否、滅却させる。

「……滅却師、か？」

海燕が確認するように言うところ青年はコクリと頷く。

「僕は滅却師の石田雨竜^{いしだうりゅう}、死神を憎むものだ……黒崎に志波、君達

をね」

あの夜の翌日に石田が自分のクラスメイトだと判明した一護は尾行を行う。

勿論、霊圧のコントロールが苦手な一護に気付かない筈も無く――

「いつまで付いてくるつもりだい？黒崎一護」

――となる訳である。

空座町とその周辺には、虚の大群が押し寄せていた。

石田が虚を誘き寄せる為の撒き餌を使ってどちらが多く倒せるかと言う勝負をしようと言ったのだ。

「僕に殴りかかる暇があったら走り回った方がいい。虚は霊力が高い人間を襲う筈だからね」

平然と言ったのける石田を突き飛ばした後、一護は虚を探すために空座町を走り回る事になった。

ルキアが戦っている相手はオランウータンの様な姿をした知能の低い虚。

得意の鬼道を放つても、死神の力は少しも戻っておらず、その鬼道は虚に直撃するも、幾分のダメージも与えてはいない。

虚がルキアに襲い掛かった時、虚を蹴り飛ばすものがいた。

それは一護の体に入ったコン。

ルキアに用があるのだが、如何せん探すのに夢中になった為にそれは記憶の彼方にある。

「早く思い出せ……」

「痛い痛い！！痛いっすよ姐さん！あ……俺何かに目覚めそう！！」

学校の運動場で虚に襲われているのは井上と有沢、そして二人の友人の本匠千鶴だ。
ほんしょうちづる

虚の能力で操られる男子生徒達を相手に、空手得意とする有沢が奮闘している。

その様はメスの鬼を村人達が討伐しようと躍起になっている様である。

「かかつてこいやー!!」

半ば暴走気味の有沢を虚が種子を撃ち込んで制止する。

運動場に井上と虚が立っており、先ほど種子を撃ち込まれた筈の有沢と本匠の傷は綺麗に消えている。

井上の周りに浮いている、妖精の様な者達の言葉を復唱し、虚に攻撃をしようとする。

「椿鬼……孤天斬盾、私は拒絶する!!」

井上は椿鬼を虚に撃ち込む。

虚は真つ二つに裂け、そのまま消滅する。

井上もその場に倒れたのだが、何故かその場に現れた浦原商店の面々に連れて行かれた。

そして握菱鉄裁つかびしテッサイの肩にはチャドが担がれており、二人共誘拐された

——のではなく浦原商店へと運ばれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3718y/>

強き燕は二度羽ばたく

2011年11月23日09時51分発行